ポスター | 1-18 川崎病・冠動脈・血管

## ポスター

## 川崎病・冠動脈・血管③

座長:鈴木 啓之 (和歌山県立医科大学)

Thu. Jul 16, 2015 5:20 PM - 5:50 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

I-P-131~I-P-135

所属正式名称:鈴木啓之(和歌山県立医科大学 小児科)

## [I-P-133]MR coronary vessel wall imaging による川崎病冠動脈病変の経時的変化―光干渉断層法との比較―

○真田 和哉, 新田 哲也, 下薗 彩子, 田原 昌博 (あかね会土谷総合病院 小児科)

Keywords:Kawasaki disease, MR coronary vessel wall imaging, Optical Coherence Tomography

【背景】川崎病冠動脈瘤、拡大の退縮例では内膜の壁肥厚が存在し、CT、超音波検査による評価は困難と言われ ている。一方、内膜の評価に有用な血管内超音波( IVUS)、光干渉断層法( OCT) は侵襲的である。【目的】 black blood法 (BB法) を用いた MR coronary angiography (MRCA) が川崎病冠動脈病変における壁肥厚の経 過観察に有用であることを明らかにすること。【方法】2007年4月-2014年12月に当院で川崎病冠動脈病変を有 する52症例に対しのべ101回、 BB法を用いた MRCAを施行した。うち23例で複数回、のべ72回施行した。この 23例のうち CABG、冠動脈ステント留置を行った1例をのぞいた22例について、 MRCA所見の経時的変化を検討 した。また、2例で MRI施行と同時期に OCTを用い冠動脈病変を観察した。この2例について MRCA所見と OCT所見を比較した。【結果】内訳は男15例、女7例で、初回 MRCA (BB法を用いたものと定義する)施行まで 川崎病発症から平均2年10か月が経過していた。初回 MRI施行時の年齢は平均5.5歳、撮像回数は平均3.1回、初回 MRCA施行からの経過観察期間は平均3年5か月だった。全例で川崎病発症後に冠動脈瘤または拡大を認めた。初 回 MRCA撮像時に冠動脈瘤、拡大を有した症例は19例だった。これらの症例はすべて BB法にて壁肥厚の所見を認 めた。このうち9例は自然消退したが壁肥厚の所見も消失したのは3例だった。初回 MRCA施行時に冠動脈瘤、拡 大はなく壁肥厚のみを示したのは2例だった。このうち1例は後に壁肥厚の所見が消失した。経過観察中に狭窄を 認めたのは5例だった。 OCTを施行した2例では BB法で壁肥厚を認めた部位に内膜の線維性肥厚を示唆する所見 を認めた。【結論】 BB法を用いた MRCAは川崎病冠動脈瘤、拡大が退縮した症例において、壁肥厚の経過観察に 有用である。遠隔期の血管病変については不明な点が多く、長期間の経過観察と症例の蓄積が必要と思われた。